

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特例郵便物取扱規定第六二七号  
平成二十八年十二月一日発行 第百十九号 第三十二号

# ホトトギス

十二月号



## 俳句随想〔四百十四〕

汀子

朝日カルチャーで特別講演会をして欲しいと申し出があつた。演題に「虚子を語る」という依頼であつたのでお引き受けした。もう虚子のことを知っている人も減っているからとのことであつた。同じ朝日カルチャーの講師として教室を持つている千原叡子さんも、出席すると伺つたので、彼女と少し打合せをして二人の共通の虚子を語れば興味を持つて聞いて頂けるということになつて当日を迎えた。始めは私が虚子と碧梧桐の關係から話を進め、そのうちに虚子が叡子さんに送つた人形の椿子の話に持つて行くべく、虚子が叡子さんの父上安積素顔さんとの出会いから叡子さんにバトンタッチした、その時、叡子さんが、『椿子物語』は身障者に対する虚子先生のお心です。と言われて、そのことは私も初めて伺う事として感動した。虚子は盲目の俳人緒方句狂、そして叡子さんの父上安積素顔さんへの心を持ち素顔さんの介添えをする少女叡子さんに椿子という人形を贈つたのである。その他、ハンセン病の關係の俳句の選者を虚子も年尾もして来たことにまで話が及んだ。今は私が二十年近く選者をつとめていると話を結んだ。患者であつた玉木愛子さんもホトトギスの俳人として投句されていた。ハンセン病も治癒する病となつた。俳句は様々な分野で様々な心の糧となつている。

一人でも多くの方々に俳句を知つて戴き、親むんで頂ける時代になつた。コンピューターなどに拠る時代だからこそ俳句が心の安らぎであるように願つている。

句日記 汀子

平成二十七年十二月一日 有恒俳句会忘年会句会

はやばやと師走の会に参加せし  
月替り年惜めとや偲べとや  
名園としては淋しき冬紅葉  
名残あり洋園の冬のシャンデリーア  
きりのなき蓄葉名園司る  
十二月一日 無名会

冬帝に都会の夕べ来りけり  
園の木々冬に従ひゆきにけり  
園といふ全体を見て冬木立  
朝の間の快晴師走はじまりぬ  
冬帝に従ふ旅程ありにけり  
水面見て師走の心忘れつつ  
杖持ちて巡る庭あり冬木立  
十二月一日 忘年伝俳句会

すんなりと師走へ心入れ替ふる  
快晴にはじまる師走なりしこと  
プローチを聖樹に替へて来たるだけ  
十二月五日 芦屋ホトギス会

北風や離陸着陸一とゆらぎ  
冬枯に残る彩りなほ存す  
納め句座とて満席となりしこと  
十二月六日 下萌句会  
風癖のまま枯芒なりしこと  
渡り来し鶴に力をもらひけり  
抜けて来し山路なりけり冬霞  
十二月七日 ロイヤル俳壇

一年の過ぎゆく早さ山眠る  
つつがなき一日はじまる冬紅葉  
ふり返る反省ありて年の暮  
この燃ゆる色数多も見ず冬紅葉  
十二月八日 大阪倶楽部

日当れば枯野に動きをりしもの  
短日のやりくりの朝はじまりぬ  
この寒さ先の寒さは考へず  
寒くなり欠席多き会となる  
悲しみを告げず寒さのことを言ふ  
計画の通りに行かぬ師走かな  
短日に追ひかけられてをりにけり  
十二月八日 綿業倶楽部

冷たしと思ひし朝を出掛け来し  
馳け足で師走の日々を追ひかける  
十二月十日 清交社

クリスマスケーキ選びて会となる  
冬木立雨の予報に従へり  
小さくとも聖樹飾りてありし会  
柏汁に決まらぬ人数なりしこと  
稿債を一つ果して会師走  
落葉敷くまま尽くるまま家居して  
柏汁にわが家のかくし味のあり  
十二月十一日 工業倶楽部

湖中句碑鴨の寄るべとなりしこと  
雨上り師走の町の動き出す  
師走てふこととは別の用かかへ  
十二月十一日 アネモネ句会  
著ぶくまれて安心感のある旅路  
さまざまなことありし年忘れめや  
枯れてゆくまでの華やぎ蔵す木々  
忘れられざる思ひ出に著ぶくれて

著ぶくれてゐるがもつともそれらしく  
贈「牡丹」新年号

落葉して掃かぬ風情を楽しめる  
庭手入れよりはじまりし年用意  
霜除の辺りにありしはかりごと  
牡丹の冬芽蔵せし力あり  
華やげる落葉の色を置く大地  
十二月十二日 九州ホトギス俳句大会前日句会

来て迷ふ道も楽しき小春かな  
師走とは思へぬ日和旅心  
十二月十三日 九州ホトギス同人会  
晴女 晴男 冬を遠ざけし  
邂逅の誰彼冬を遠ざけし  
人生のかく冬晴の旅心  
十二月十三日 九州ホトギス俳句大会

ととのへる庭園に冬ざれのなく  
日向ぼこめき名苑の片隅に  
十二月十六日 夏潮句会

はかりごとありて無きごとクリスマス  
冬の朝とは思はれぬ陽気かな  
師走てふ遊び心のあるままに  
クリスマス気分庭にもありそめし  
菌の治療つづきのありて年を越す  
阿蘇の水鴨に命を与へつぐ  
十二月十六日

点滅の青と白き灯シクラメン  
青き灯も白き灯も闇抱く冬  
十二月十八日 時雨句会  
柚湯とて正座五分はかかさずに  
冬帝にゆだねし心ありにけり  
年忘にも似て三百五十回  
快晴の冬をこもりて勿体なし  
年末の渋滞に巻き込まれしと

廣太郎句帳

廣太郎

平成十七年十一月三日 蕉心会

街師走今日も止まりし山手線  
水面てふ山茶花終の咲き短  
又講座頼まれもして日忙し  
水鳥の沈んで浮いて川忙し  
天帝に仕上げられたる冷たさに  
冬木立ここに模型屋あつた筈  
十二月四日 六甲会  
手袋の中に 思惑二つ三つ  
風呂吹を吹いて宇宙の話など  
黒革の手帳皮手袋が閉ぢぬ  
六甲の水に風呂吹煮上がりぬ  
手袋の指で君の名書く車窓  
十二月六日 野分会屋例会  
オーパーを脱ぐよりキリエレイソン  
十二月六日 青風会屋例会  
冬蝶の纏れて過去を引き寄せて  
浪の花百万石の夢乗せて  
冬蝶の高さに日矢の及ばざる  
能登の風知りに魂沈めゆ  
冬蝶の草に魂沈めゆ  
十二月七日 新聞選考時  
手袋をカトリック聖水に浸す指  
十二月七日 角川一併句一出句  
茶の花に日は寄り易く逃げ易く  
蕊揺れてゆれて茶の花日和かな  
黄落の精が物顔に神無月  
小六月主日の前の静寂かな

十二月十日 土筆会

推敲を障子明りにをさめたる  
一本の黄落園の要とす  
蕎麦搔にワインを選ぶ漢かな  
十二月十三日 九州ホトギス同人会、大会  
名園を統べ冬紅葉黄葉  
江戸の冷え発ちて冬暖かき浮葉  
名園の水和らげて鴨浮寝  
明けてゆく空消えてゆく寒さかな  
水の綺羅日の綺羅浮寝鴨の綺羅  
虚子句碑の一文字づつにある小春  
十二月十四日 朝日カルチャー若草句会  
漱石の星肥後へ繋げてゆく鉄路  
枯木統へ虚子句碑連枯木湖宿  
冬帝の刃都心を袈裟懸けけり  
太白て凍星に人近づけり  
冬帝に都庁天辺より暮るる  
十二月十五日 北國文芸選考時  
故郷へ肥後へ師走の旅忙し  
十二月十七日 登高会  
北萩に現れ電飾に吸はれゆく  
枯萩の風に纏るる術のなく  
短日の計報は若き同人と  
十二月十八日 時雨会百五十回記念句会  
睨むふはと旅の疲れを解く柚湯

十二月二十三日 目黒学園句会

狸汁山の生活に馴れもして  
冬帝に急かされもして祝ぎの句座  
結論は一人柚湯に浸かるより  
十二月二十一日 北國文芸新年選考時  
初便二十一年振りてふ友も  
十二月二十日 若水句会  
固さとは冬芽とあなたとの絆  
行年の第九はフルトヴェングラ  
冬芽抱き未来へ弾む一樹かな  
十二月二十三日 目黒学園句会  
明日へと冬芽の黙でありにけり  
年惜むやつと二人になれし時  
もう何も残すものなく年惜む  
行年やそるそる余生てふ二文字  
大根焚五山は黙を解かざる  
行年や還暦重く受け止めて  
年惜む仕事の山を睨みつつ  
十二月二十四日 田鶴 新春吟詠  
健康を取り戻す身に雑煮かな  
増えもせぬ減りもせぬ箸紙の幸  
食積に健康な手の伸び行けり  
歯固に老いはれやうとも年酒酌む  
十二月二十五日 カトリック新聞選考時  
クリスマス祝ふ仕事を切り上げて  
十二月二十七日 青風会東京例会  
帰りの花芝公園の明け初むる  
寒禽の声寒禽を飛び立たす  
目覚めゆく園眠りゆく枯木立  
噓してより電師走の中心かな  
十二月二十七日 野分会東京例会  
曾祖父の着し外套は曾孫へと  
摩天楼八艘飛びに冬帝来  
オーパーを一喝に枯れてゆく園

# 雑詠 廣太郎 選

お召しかへして団扇手に坐らるゝ 福山 竹下陶子  
 きつさきの風つらぬける花菖蒲 同  
 大統領被爆者を抱き風薫る 香川 湯川 雅  
 雲の峰 背後窺ふ雲の峰 同  
 沸く高さ降らす広さや蝉時雨 同  
 花カンナ冷めて退勤てふ人出 同  
 湖の 見ゆる 坂道 月 見草 東京 今井千鶴子  
 糊利きし浴衣四角く歩きをり 同  
 一人居の部屋にもそつと秋の来て 同  
 大文字火は風を呼び雨を呼び 神戸 山西商平  
 帰り来よ盆休には連れ立ちて 同  
 墓洗ふ愚痴二つ三つこぼしつ 同  
 夏山に 一村深く埋れぬし 長岡 安原 葉  
 花氷撫でぬし掌もて握手かな 同  
 冷房のやや効き過ぎと気づくまで 同  
 川風の風鈴に来て透きとほる 東京 橋本くに彦  
 打水の乾きの早き日なりけり 同  
 青空の音ひとつ無き原爆忌 同

灼け石に手を置けば地震の記憶 熊本 岩岡中正  
 たましひのごと瓦礫より梅雨の蝶 同  
 瓦礫みな祈る形に炎天下 同  
 蜘蛛の囀の光は虫に見えぬらし 八尾 山下美典  
 螢火の奔放闇をぬらしつつ 同  
 短夜の秒針急ぎ回るなり 同  
 オリソピック放送見終へ昼寝かな 松本 唐澤春城  
 朝と晩取り違へたる夏休 同  
 佳き先輩頼もしき弟子夏終る 同  
 人知れずこの世の底の蛆の刻 神戸 山田佳乃  
 青田道とは故郷へ帰る道 同  
 アスファルト焦げたる午後の夾竹桃 同  
 東京の土なき街の暑さかな 龍ヶ崎 今橋眞理子  
 口にせぬ暑さを顔の語りをり 同  
 本当の暑さを待つてゐる若さ 同  
 山の日の稜線凜とありにけり 神戸 涌羅由美  
 刀豆の莢に収める日の力 同  
 流れ星大三角に吸ひ込まれ 同  
 大仏へハーローニーハオ夏休 奈良 古賀しぐれ  
 南大門涼し仁王の余り風 同  
 苔庭の阿吽の配置石涼し 同  
 一方のちらりと見えし夏暖簾 神戸 千原叡子  
 襖はづし鴨居の高さ残りをり 同  
 故事多き地に泊つ真夜の虎が雨 同

# 雑詠句評(十一月号より)

中正・葉・眞理子

肖子・保佳・とほ歩

美奇・憲明・むつみ

靜龍・廣太郎

## 白百合や遺影の君の男振 奈良 古賀しぐれ

「白百合」に象徴されみよな清廉な人であった。しかも「遺影の君の男振」と、葬儀の遺影の前で思わず泣き出さんばかりの臨場感あふれる一句である。ここにたんに良き故人を偲ぶというだけではない切なさがある。

まず「白百合や」と言い切って、その上で、「遺影の」「君の」と「の」を重ねて流れるようなリズムで、一気に「男振」ともってゆく力強い詠みぶりに、作者の溢れるような悲嘆が十分に表現されている。さらに最後に「男振」とよみ終えて、その故人

の残像が目映るようにはできた、これは真情のこもった絶唱である。(中正)

先年亡くなられた俳誌「未央」前主宰吉年虹二様の追悼の会があり、その会の様子を詠まれた句である。ホトトギスでも大活躍された虹二様は筆者も大変御世話になり、年は離れているのにまるで友のように接して下さった。「白百合」に囲まれたダンディーな遺影が、思い出を美しく紡いでいる。(廣太郎)

## 誓ふことありこの滝にこの句碑に 神戸 和田華凜

まず、作者の父、後藤立夫「諷詠」主宰が去る六月二十六日、七十二歳で逝去されたことに対し、謹んで哀悼の意を表します。

その後を受けて作者が、祖父の比奈夫名誉主宰のもとで「諷詠」主宰に就任されたと伺っている。その事を踏まえてこの句を読むと、「この滝」は夜半初代主宰がこよなく愛された箕面川の中流にある箕面滝であり、「この句碑」はその滝を称えて詠まれた有名な「滝の上に水現れて落ちにけり 夜半」の句碑であり、この滝と句碑に対して作者は、夜半、比奈夫、立夫と受け継がれた花鳥諷詠の大道を歩む「諷詠」の伝統と使命を受け継ぐ決意を誓われたすばらしい句であると思う。情景を通して作者の心情が読む

側にもよく伝わってくる。(葉)

去る六月二十六日に最愛の御尊父様であり、俳誌「諷詠」主宰の後藤立夫様を亡くされた作者である。そのお悲しみの中、今後この「諷詠」の主宰を継承する御決心をされて凛々しく立ち上がられたのである。この大結社を継がれるという事を決心されるまでには想像を絶する葛藤があった事は想像に難くないが、それを「誓う」という表現で力強く宣言されたのである。そしてこの句は「灌」が詠まれている。そう、曾祖父にあたられる後藤夜半様の名句を意識しておられるのではないだろうか。これはもう感動を通り越して神々しいと言わざるを得ない。(廣太郎)



天地有情

水涸れて露となりし滝の老  
 どちらから涸れしともなく夫婦滝  
 名草の芽とは誇らしく慎ましく  
 春雨にいとはん濡れて行かはず  
 夕虹を一人見てゐるベシチかな  
 虹に手の届くはずなく人偲ぶ  
 すぐ日焼せしは北方系の裔  
 あな暗やとは鉄門の五月闇  
 花蜜柑ここはお大師様の山  
 舞奴ゐて姉小路は鉾の町  
 地震の地の糸のころ草として吹かれ  
 赤赤と鬼灯われに為すことあり  
 やつと梅雨明けて夕べの月細き  
 夏山に再三再四地震振れる  
 言ひ訳を見透かされぬし日短  
 ぼうたんの心に寒肥置きにけ  
 人を待つ心涼しくあらねばと  
 朝顔に己が空あり咲きのぼる

神戸 後藤比奈夫  
 同 稲畑廣太郎  
 東京 同  
 神戸 三村純也  
 同 長岡 安原 葉  
 同 神戸 和田華凜  
 同 熊本 岩岡中正  
 同 東京 今井千鶴子  
 同 福山 竹下陶子  
 同 仙台 赤川誓城  
 同

冷房にたちまち庭の遠ざかる  
 あつ気なく育つてしまひ今年竹  
 轉の雨に烟ると言ふことも  
 鳥の巢の高さにありし鳥の知恵  
 向き合うて苺つぶせし妻は亡し  
 甚平着て俳句作つて寿  
 蓮池に来て現世でありしこと  
 蓮開き切らざる姿尊しや  
 滝離れしばらくはみな声高に  
 若竹の伸びに驚く旅帰り  
 晴れ切つて睡蓮覆ひ尽す沼  
 睡蓮も抱つこのややも眠くなる  
 灯を消して星の風入る庵涼し  
 たそがれを待たず城址の月見草  
 御僧を驚かしたる守宮かな  
 接近の火星と合歡の花浄土  
 六甲山の夏若き日の稽古会  
 万物の命息づく夏の山

龍ヶ崎 今橋真理子  
 同 尼崎 柳生清秀  
 同 相模原 木村享史  
 同 吹田 大橋 暁  
 同 東京 大久保白村  
 同 同 河野 美奇  
 同 金沢 藤浦昭代  
 同 神戸 千原叡子  
 同 東京 山田閨子  
 同

い子選

## お隣

### 稲畑汀子

ここ何十年、私は目が覚めると朝風呂に入る。二階にある風呂場は湯船の北側に大きな硝子が入っていて、その外に小さなペランダがついている。半円形の瓦を組み立てた覗き窓が五箇所手摺りの飾りのように付いていて、湯船に沈むと目の高さ以外が見通せるようになっていた。姑が亡くなったあと土地が分割され、北側は亡夫の兄嫁が一人で住んでいた。ペランダの飾りの隙間から

娘の動静が見えていたのであるが、九十歳近くになって亡くなってしまった。遠い地に所帯を持っている甥や姪たちは誰もそこへは帰って来ず、土地は不動産屋に渡って、今は空き地になっている。

その北側の角の邸宅にかKさん一家が住んでおられた。いや今でも確か住んでおられる筈である。二人の息子さんがおられ、ご長男は廣太郎と同級生だったが、大学は北海道へ行かれた。いつも前庭の芝生の手入れをされているご夫婦の姿が見えたり、ガレージから出入りする夫人の姿があった。

私は仕事で出掛けることが多く、今はすっかり交流が無くなってしまった。

毎朝、私は湯船の中で五分間正座をする。この習慣を始めてから何年になるだろうか。欠かさず三百数える間、ペランダの隙間から見えるKさんの家の様子が気になった。白いカーテンが一階も二階も一度も開いた様子がない。人の気配がしないことに気がついてしたが、それは私が朝風呂に入っている間だけで、すぐに忘れてしまっていた。

たまたま夜に帰ってきてお風呂に入った時、Kさんの家の一階も二階も電気が灯っていた。「ああ、いらっしやるんだ」とほっとした。でも人の気配は感じられなかった。

何十年も昔、我が家にはいつも猫がいた。ミー！と言うとニヤーと擦り寄ってくる三毛が家族の一員になっていた。ある日、玄關ホールで粗相をしたので、私はミーを抱いてその場所に連れて行き、「ここでははいけません」とお尻を叩いた。「ぎゃあ」と鳴いてミーはそのまま家を出てしまった。いつか帰って来るのを待っていたが、ミーはKさんのお宅で飼って貰っているのを知った。Kさんの塀の上に坐っているミーがいた。

「まああなたはここにいたの？」と塀を見上げたら、「ニヤー」と流し目をして私を見下ろしている。「じゃーお利口にして可愛がって貰いなさい。いつでも帰っておいで！」と言っても知らん顔してそっぽを向いた。

この辺に猫を見かけなくなって久しい。近所の人達の動静と係

わりなく、私は仕事で忙しく過ごしていた。毎週上京して土日は地方に旅をする。家居をする時は朝風呂に入ることは変わりがないので、その時にまたマさんのお宅の様子を見て、白いカーテンが閉められたままなのが気になっては、忘れて仕事に追われていた。

ある日、大阪の句会二つを済ませて帰宅すると七時を回っていた。食卓に置かれた郵便物の一つずつ見ていたら、マさん宛の郵便が紛れているのに気がついた。明日、郵便屋さんが来たときに渡さなければ、と思つて勝手口へ行こうとしたときに、ふと、それを届けにマさんの様子をそれとなく尋ねてみようと思ひ立つた。

我が家の鍵をかけて、私は郵便を手にマさんのお宅のベルを押した。反応がない。もう一度押してみた。「はいー」小さい声が返つて来た。「あの一私、隣の稲畑です」「お待ち下さい」

大分経つて表の門がぎーと開いた。「Kさん?」「はい」「郵便が誤配されたので持つて参りました。御無沙汰してしまいました」「私こそ」「ご主人さまは?」「お隣のお嬢様が亡くなられて四カ月後に亡くなったのです」「あらあ一つも知らなくて御免なさい」「お嬢様にはよくして頂きました」「車の運転はお辞めになったの?」「はい、実は私、マという病気であることがやっと分かつて、今薬でこうしていられるのです」「まあ私なかなか家に居られないけれど、留守番が居ますから何でも言つて来

て下さい。随分昔の話ですが。家の猫が家出して、お宅で飼つて下さっていたでしょう?」「あーあれはお宅の猫ちゃんだったの?」「はい、家でお粗相したので叱つたら家出したのよ」

「まあ、うちは野良猫や野良犬に餌をやつてたのよ」「それはお世話になりました。我が家のお風呂場からお宅が見えるので、どうしていらつしやるかと気になっていただけけれど、郵便の誤配のお陰でお目に掛かれて本当によかった。さあお家に入つてー」

我が家の鍵を握りしめて私は人気のない道を急いで返した。

